

医学・薬学の根源となる 偉人たちの裏ばなし

岩田明子

このコーナーでは、ドイツ文化圏で活躍した偉人たちの裏話を中心にご紹介していきたいと思います。まずは、誰もが知っている文豪ゲーテを2回に渡って取り上げます。

● 様々な顔をもつ偉人の素顔

ゲーテは皆さんもご存じのとおり、ドイツを代表する文豪です。日本人がゲーテと聞いてまず頭に浮かぶのは、受験勉強でおなじみの『若きウェルテルの悩み』(1774年)かもしれません。この物語は、恋に悩む当時の若者たちの心を驚つかみにし、ヨーロッパ全土で主人公ウェルテルや恋人シャルロットの服装が大流行したほどの大ベストセラーとなりました。彼は生涯にわたって恋多き詩人としても有名ですが、弱冠25才にして書かれたこの処女作において、すでにその本領が発揮されていたことがわかります。

その翌年、ワイマール公国のカール・アウグスト公から招請を受けた彼は、故郷フランクフルトを離れてワイマールに赴きますが、そこでの人生も順調で、政治家として宮廷顧問、枢密顧問官、最後は政務長官という最高の地位にまで上りつめることになります。

そして今回ご紹介したいのは、日本ではあまり知られていないゲーテの「自然科学者」としての顔についてです。

● ワイマールで見た『色彩論』の現実

私が初めて自然科学者としての彼の顔と向き合ったのは、ゲーテがその後の生涯を過ごすことになるワイマールの「ゲーテハウス」に足を運んだときのことでした。

たいへん驚いたのは、それぞれの部屋の壁が異なる色で塗られていることでした。入口の広間には楽しい雰囲気を出す黄色、客人の部屋には心温まる淡いローズ色、蔵書が保管されている図書室には落ち着いた時空を演出する水色、そして家族で食事をする部屋や彼自身の精神活動の中心となる書斎には、心和む緑色があしらわれていました。

晩年に書かれた『色彩論』には、色によって心や体は異なる反応をするという観察結果が記されているのですが、ゲーテは自説に基づき、使用目的に合わせて壁の色を塗り、色彩効果を実感しながら生活していたということになります。

さらに驚かされたのは、『色彩論』は教示編・論争編・歴史編の3篇から構成されている

第1回 ゲーテ ①



ゲーテ生誕200年の切手
(谷覺氏所蔵)

Johann Wolfgang von Goethe (ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ 1749年8月28日～1832年3月22日)。ドイツの詩人・小説家・劇作家・法律家・政治家・自然科学者。フランクフルト生まれ。『若きウェルテルの悩み』『親和力』『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』『ファウスト』などの著作を残したドイツを代表する文豪。自然科学者としての顔を持ち、色彩論、生態学、地質学、気象学などの分野で著作が数多く残されている。



ちくま学芸文庫『色彩論』
ゲーテ 著 木村直司 訳
筑摩書房 刊 1,500円＋税

のですが、その「論争編」では、なんとニュートンが批判されていることでした。ニュートン対ゲーテの対決…。ゲーテは、ニュートンにいったい何を申し立てたかったのでしょうか？

● ニュートンとの対決

「万有引力の法則」を発見した物理学者ニュートン(Isaac Newton 1642～1727)は、1704年に『光学』が世に出ると、光学においても第一人者といわれるようになりました。

ニュートンの光学では、光は屈折率の違いによって七つの色光に分解され、これらの色光が人間の感覚中枢で色彩として処理されるとしています。

一方でゲーテは、色彩が、屈折率という“数量的な性質”に還元されてしまうことに不満を隠すことができませんでした。

ゲーテの『色彩論』は、『光学』のおよそ100年後の1810年に刊行されました。彼はニュートンの光学が世に認められていく様子を見るにつけ、自分の色彩論を西洋人が理解するかしないかは、とても重要な分岐点になるとさえ考えていたのです。

ゲーテは、光を影との“関係性”のなかでも解いていき、最終的に「色彩は、なかば光、なかば影である。そして、光と闇の結婚である」という結論を引出しました。つまり色彩は、光と影の交錯から生じる原現象(Urphänomen)なのであって、光だけを分析しても、光の本質はおろか、自然現象そのものの本質を見逃すことになると主張したわけです。

● 『色彩論』の今

「色彩論」がその後、どの教科書にも紹介されることがなかったことを考えれば、この戦いにおいてゲーテが惨敗を喫することになっ

たのは明らかでした。

ところが、たいへん興味深いのは「不確定性原理」を発見したハイゼンベルク(Werner Karl Heisenberg 1901～1976)は、『色彩論』から約120年後の1932年、「ゲーテのような偉大な人物が、ニュートン光学の進歩に反対する戦いに全力を注いだことには、それなりの立派な意義があった。もしゲーテに非難すべき点があったとすれば、ニュートンにとどめを刺さなかったことだ」と、まるで仇討のようにしてニュートン光学にとどめを刺すような発言をしていることです。ハイゼンベルクは、生涯ゲーテの影響下にあり、生命の躍動感と直接性の断念こそが、ゲーテの激しい戦いの本質であったことを深く理解していたのです。こうしてゲーテの生涯をかけての真剣な戦いは、量子力学という新たな舞台で再評価されるに至ったのです。

「色彩論」そのものも、現在では赤が交感神経を、青が副交感神経を刺激することが実証され、色彩が人の心や生理に及ぼす影響が詳細に検証できるようになったことで、「知覚心理学」や「色彩心理学」の分野でも、ゲーテの有機的な考え方が受け継がれています。

機械論では、観察対象をバラバラにしても、再度組み直すことが可能だと考えますが、有機論では、部分的にバラバラにしたら、それを統合していた「働き」は消滅すると考えます。

自然の背後で働く生命の働きそのものを、ときに自然科学者として、ときに詩人として表現しつづけた偉人ゲーテ。一生をかけて彼が磨き続けたものは、野に咲く小さな花にさえ美の本質を見出すことのできたその審美眼、そして「自然という書物」を神聖なるものとして解読し続けたその卓越した観察眼だったのかもしれない。



いわた・あきこ

心理カウンセラー。ドイツ語翻訳家。立教大学大学院文学研究科後期課程を経てハイデルベルク大学神学部博士課程に留学。比較宗教学・宗教心理学を修める。ドイツにて、自然療法と精神神経免疫学を基礎とする心理療法の資格を取得。自然療法についての翻訳書多数あり。著作として『「アルプスの少女ハイジ」に学べ！元気を取り戻す11の方法とは？』(飛鳥新社)がある。